

文語日誌 平成二十六年一月二十日

余通産省に入りて二度目の勤務は特許廳なりき。當時の特許廳は古き五階建ての煉瓦造りにて、正面玄關の石段には地盤沈下により龜裂生じたり。所屬は長官官房總務課、配置は條約係長なり。課は三十名足らずの規模にして課長を除き大部屋にて執務せり。タイプライターの音のほかは靜寂そのもの、交はさるる言葉も少なく、多くの者は黙々と書物と書類に目を通して日中を過ごす。

工業所有權の世界は十九世紀より國際化進み、數十カ國の加盟國を擁する萬國パリ同盟條約なるものありてスイスはベルンに事務局を置く。公用語は佛語なり。然らば若造なりと雖も條約係長は重要なポストなるも、係員は他に居らず。ただ僅かに白髪を残すのみの老翻譯官着古したる紫色の背廣着て柔和に微笑む。余彼と言葉を交はすはギリシヤ・ローマ法諺辭典の在りかを問ふ類ひの時のみなりき。

パリ條約は技術變化に對應するため數年に一度國際會議を開きて大改正を行ふ。それ自體條文數多き大條約にして、事務局の提案理由のほかそれに對する各國意見、會議に於ける議事内容等を記すのみにても厩大なる資料となる。しかも過去數回の改正會議を経たればその資料を全て收藏するには大いなる本箱二基を要す。何十卷にも及ぶその資料は佛語なれば讀む者なく、その赤表紙は收納當時の儘なりき。ここに辨理士その他特許専門家を以て會員となす日本國際工業所有權保護協會なる團體ありてその事務局員余の佛語を解すを聞き及びて、余にその翻譯を慫慂す。特許法を解し且つ佛語を良くする者ほぼ皆無の時代なれば、翻譯料は他のアルバイトと比較を絶す。翻譯の量に制限なく多々益々辨ずと言ふ。薄給の余に取りては望外の金蔓なりき。

余條約係長に就任、引繼ぎたる書類資料等を詳らかに檢むるの中にリスボン會議日本政府提出意見なる數十頁に及ぶ書類あり。リスボン會議は次回改正會議にして二年後に召集せらるる豫定なりき。余會議に使用の目的ならば佛語に翻譯すべしとてその仕事に掛かる。余當時若氣の至りにて課長、課長補佐を無能なる官僚として輕蔑し居れば此仕事に關して全く彼等に報告せず。何人にも知らるることなく數カ月後に作業を了す。その後著任早々の上司一日余に向ひて言ふ様、吾條約關係の資料を閲しに日本語の資料論理的ならず往生せしに偶々その佛譯を見るに至りて數多ありし疑問悉く氷解す、君もし佛語を解さば翻譯を讀むを勸むと。余そが翻譯者余なることを告げず。上司の嫉妬を懼れてなり。彼を含め全ての關係者翻譯は條約局の所産と見做しけむ。リスボン會議の代表團結せらるるに及び、長官、總務部長、總務課長、審議室長、法制局次長、外務省條約局より事務官二名にて、余は人選に漏れたり。

當時余はスキー覺え立てにしてその魅力に惹かれ、冬はほぼ毎週金曜日の夜行にて上野より

上越に赴き、日曜日の夕刻列車にて東京に戻るを慣ひとせり。スキーは總務課長の秘書に頼みて室の片隅に隠せり。當時器具は未だカンダハ―を用ゐ、板も自らパラフィンを塗るなり。余はシテムボーゲンを終へ、クリスチャニアの技に挑みつゝあり。一泊の民宿は足を炬燵に入れ煎餅布團二枚のみ、食事は米飯の他は味噌汁と高菜漬の粗末なるものなれども満足その極なりき。

午後五時ともならば日中の單調より解放せられ、課員打揃ひ勇んで雀莊に赴く。葵莊なる麻雀屋近くにおいて我等が馴染みの場所なり。愛想よき女將南方系の血混じれるが如き浅黒き女なり。慌しく食事をかき込み勤務時間より長く牌を打ちて終電にての歸宅なむ我等が日課なりし。三年に及ぶこの時間、これを有効に過ごさば何事か一藝に秀いづるを得たること疑ひなし。されど今改めて想ひ起さばこの時期余は瞑想の訓練を大いに積みたりといふべし。牌を打つときゲームに集中して相手方の誰なるかを知らず。ただ記憶するは牌の動きのみなり。これ三昧の境地に非ずして何と名づくべしや。